

小論文

<総括>

試験時間 90 分

総解答字数 760 字

課題文の長さや設問の形式は、基本的には、例年の傾向と変わらない。昨年度のものと同様に、課題文が少し長くなったり、読解の難易度が少し下がったりしている。設問Ⅰで課題文の全体を対象として要約を行い、設問Ⅱでは自分の意見を論述する。内容は、芸術・表現論である。今ここに無いもの（目に見えないもの）とのコミュニケーションについて考える。本問を通じて、日常の自明性を疑い、新しい思考を創造することの大切さが謳われていると言える。課題文の確かな読解を前提に、みずから考える力の深浅や表現力の有無などが試されている。

<課題文の分析>

大問番号	
内 容 (主題)	「人間の創造性」について
出 典 (作者)	大嶋義実『演奏家が語る音楽の哲学』講談社選書メチエ、2022 年
長短・ 難易等 前年比較	長短 (短い・やや短い・変化なし・ やや長い ・長い) 難易 (易化・ やや易化 ・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント (設問内容・論述ポイントなど)
	課題文	学部系統的	I	要約	300 ~ 360 字	この文章を要約する。
			II	論述	320 ~ 400 字	「人間の創造性」について、この文章をふまえて、自分の考えを述べる。

※出題形式は「テーマ・課題文 (英文を含む場合は付記する)・図表・その他」

※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」

※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

〈答案作成上のポイント・学習対策等〉

課題文は、出典タイトルからもうかがい知れるように、世界的なフルート演奏者の文章である。冒頭からジョン・ケージやマルセル・デュシャンといった20世紀の前衛芸術家たちの名前と作品が紹介され、芸術は芸術それ自体の価値よりも、芸術をめぐる問いを優先するものになったと論じられていく。多くの受験生にとって、ケージやデュシャンといった名前は教科書的に知っているくらいだろう。シュールホフやアーノンクールといった名前にはまるで馴染みがないかもしれない。そうした記号は読み飛ばして構わない。要は、筆者が「芸術」や「アート」をどのように捉えているのかを適切に理解できればよい。特に難解な概念が振り回されているわけではないので、読解にあたって、それほど困難はなかったのではないかな。

設問Ⅰは、課題文の全体を対象とした要約問題である。課題文は、やや単純に言えば、新しい思考を創造することの価値→日本語における「芸術」と「アート」の違い→人間にとっての芸術のもつ根源的な意味、といった流れで書かれている。基本的には、こうした流れをしっかりと理解して、課題文に出てくる順番通りにまとめていけばよい。ただし、課題文はそれほどがちりちりと論理的に組み立てられてはいないので、どのような文言を利用したらよいのか、少し迷うかもしれない。「360字」以内で答案を作成しなければいけないので、似たような表現に惑わされることなく、端的にまとめていきたい。

設問Ⅱは、課題文をふまえて、「人間の創造性」について、自分の考えを述べる論述問題である。設問Ⅰでまとめた論点を応用し、具体的な事例もあげて、しっかりと議論を進められるとよい。具体例は、課題文に素直に回答すれば、芸術・表現系のものを選ぶことになるだろう。課題文では「芸術」と「アート」の違いについて言及されているが、そこにこだわっても議論を進ませづらいうから、自分なりに使えそうな作品をとにかく1つ取り上げて、それが突き付ける「問い」などをめぐって、論じてみよう。

また、慶應義塾大学の文学部には、いわゆる文学だけではなく、歴史学や社会学や教育学など、様々な専門性が集まっている。芸術を得意としない受験生も多くいることだろう。そのとき、芸術・表現系のネタが思いつかなければ、広く学問一般に発想を広げて考えてみるのもよい。自分が大学でやってみたい学問領域において、どのような「新しい思考の創造」があったのかを考えてみるのである。「子供」「女性」「未開」「無意識」など、学問の世界にはそれまでの常識をひっくり返す多くの発見があった。「人を愛する」という行為をめぐる、これまでに多くの発見があったに違いない。そうした、今はまだ知らないものを知りたいと思う、未知への衝動をめぐって、考えていくのもよいだろう。

学習の対策としては、教養の幅を広げつつ、現代的な諸問題をめぐって考える力を鍛えていくことが大切である。今年度に出題された内容が次の年度にも同じように出題されるとは考えづらい。ここ数年の過去問に向き合い、そこでどのような思考力が試されているのかを丁寧に確認していく作業が不可欠である。また、思考力を表現する力も必要であるから、日常的に書く訓練もしていきたい。